

GR 白雲軒 とりお



45

昭和54年5月1日

埼玉 名栗
宗教法人 鳥居観音
白雲山

表紙の説明

新緑と玄奘三蔵塔

白雲山鳥居観音の境内は30万平米、山内には江戸時代から植林された杉檜が現存しその中に広葉樹の新緑が萌え数万本のつつじが咲き乱れ、五月の白雲山は花模様でかざられます。そこにそびえ立つ法師霊骨塔です。

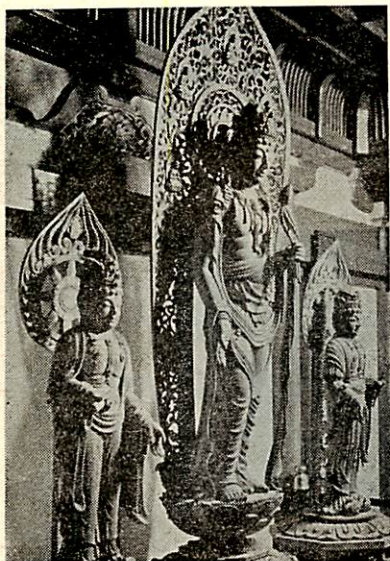
とりゐ第45号目次

| | | |
|---------------|-------------|----|
| 裏表紙 | 夏の行事案内と案内図 | 二十 |
| 鳥居観音だより | | 二十 |
| 寄進 | | 二十 |
| 田舎医者 | (其二十五) 見川鯛山 | 十七 |
| 西遊記 | (其三十八) 岡部千三 | 十四 |
| 観音行の実践 | 光山善雄 | 十一 |
| 道光禪師御法話 | (其二十七) | 八 |
| 白雲山鳥居観音四十年の歩み | | 一 |
| 表紙 | 新緑と玄奘三蔵塔 | |
| うら | 説明 | |

白雲山 鳥居観音四十年の歩み

○ 本尊聖観世音菩薩

昭和十五年



昭和十五年、鳥居観音本堂（現開祖堂）の落慶と
本尊聖観世音菩薩（総高二米）と梵天、帝釈天の開

眼式が、永平寺、管長鈴木天山禪師によって、修行されてから、本年は四十年を迎えます。

このご本尊が、開祖平沼先生（号桐江）謹刻の聖観音様で、それから仏彫の歴史が始まりました。先生の仏彫と、信仰とが合致して、より深くより高く極められて、大彫刻家として名をなされました。

○ 地藏堂と子育地藏 昭和十九年

白雲山、遊歩道を三百米程登ると、仁王門前の広場にでます。その左方に地藏堂があります。檜材でいぎざし生節の多い材で建てられ、堂内には檜の巨木の根を以って彫られた地藏様が、赤ん坊を膝に抱いて座しています。その慈愛にみちたお顔は、拝す人の心をいつもひきつけておられます。

○ 仁王門と仁王尊 昭和二十九年

白雲山遊歩道の中腹の広場から石の階段を上ると、総檜の仁王門があり、右に呵像（二、四米）左に、呷像（二、五米）が悪を払う巨大なポーズが、あたりを圧しています。

この仁王様は、桐江先生が大変に苦心されて彫ら

れたとのことです。そのことはすでに、鳥居観音と平沼弥太郎という出版物で紹介されております。

○ 玄奘三蔵塔 昭和三十五年

玄奘三蔵法師の靈骨が納めてあります。この縁起は水野梅暁老師が、昭和の始めから、中国と交流が深く、桐江先生とも親しく又厚い信仰心に心うたれ靈骨のお導きをされました。

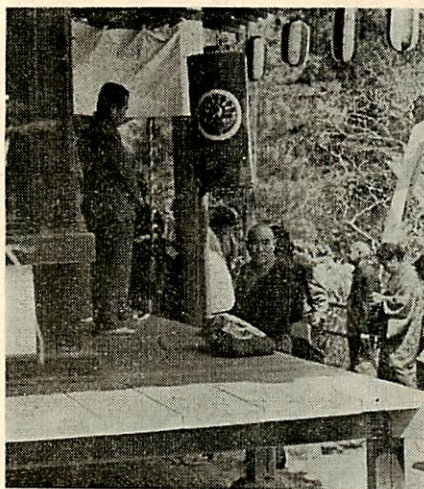
塔の建立に当っては政界財界知名の方達多数が協賛された。芳名は海拔五百米の地、塔の階下の室に銘板大理石に刻まれています。



三蔵塔の法要

○ 本堂 昭和三十三年
昭和四十二年増築
本堂、落慶供養は、高階瑞仙禪師によつて修行されました。

飛鳥時代の建築様式に現代的なものを多く取り入れて建てられ、ごう天井の絵もすばらしいものです。現在、正面に本尊聖観世音菩薩を始め、馬頭観音、千手観音、不空羂索観音、十一面観音、如意輪観音、准胝観音の七観音がきらびやかに安置されています。



本堂春季例法要

本堂左右の柱に「生滅已寂滅為樂」「諸行無常是生滅法」の十六文字の板彫があります。これは大休老師の筆ですが、これは、とみ子奥様が技をふるい入念に彫られたものです。

このような

彫りものは、桐江先生のお仕事のうちの協力ということで、その技術的な面はすぐれておられます。何枚もお彫りになって建物のいたるところにかかげてありますが、そのお心のほどがうかがわれました、心ほのぼのといったします。



板に謹刻されている桐江夫人と福土氏

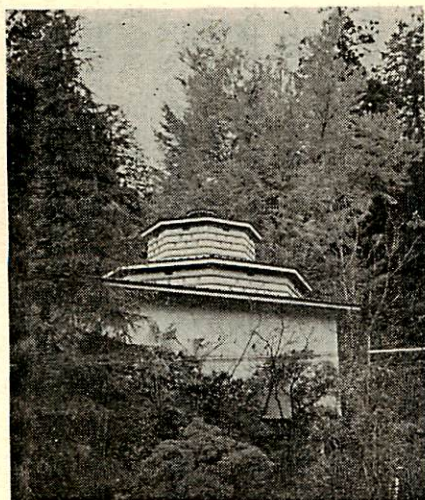
○ 鳥居 文庫

昭和三十五年
昭和三十七年

第一、第二文庫があります。

第一文庫には水野梅暁老師の遺品を始めとし、印度方面の生活文化財、仏像が多数陳列してあります。第二文庫には国重要文化財の木彫、阿みだ如来、(二米)を始め、多数の仏像と、桐江先生の彫られた仏像が陳列してあります。

入館も常時できます。



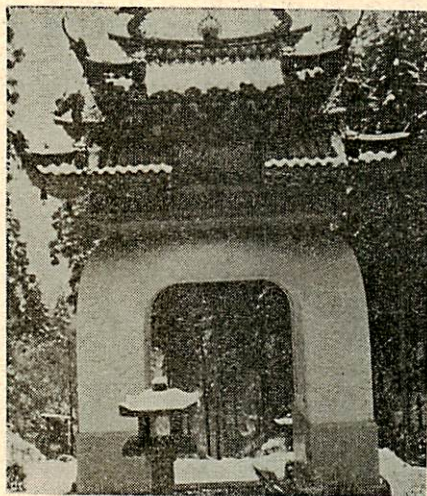
鳥居 文庫

○ 玉華門

昭和四十三年

白雲郷の車道入口より二百米のところ、玉華門と云う支那式のうつくしい門があります。杉の木立にあたりはうつくしく、調和しています。門にかかげた玉華門の題字は、高階瓊仙禅師の筆ですが、これが禅師の絶筆となりました。

玄奘三蔵法師の生れられた国のシンボルとして建てられたものです。



雪の玉華門

○ 救世大観音

昭和四十六年

白雲山の見晴海拔五百米に、真白く空にうき立って見えるのが、救世大観音です。遠く一里の地から拝むことができます。

中央の大観音の高さ三十三米、両わきの観音が、二十一米、総重量壱千トンと云われますが、風速は六十米でも平気だそうです。山々の老杉老檜のみどりと和し、又春のつつじ、秋の紅葉は、関東随一と云われています。又観音信仰の方々は阪東番外の霊地と呼ばれ、多数の参拝者があります。



救世大観音

堂宇の内部は桐江先生の全く独創的な技法で仕上げてありますが、壮ごん、華れいに目を見張ります。そして安置されている正面の阿みだ如来、薬師如来と十二神将、三十三観音、不動明王、吉祥天、壁面の壹万體観音永代供養奉納の仏像、階を上れば名栗谷一望の展望台に出られます。数十段の階を上って外から見ると胆をひやすようです。

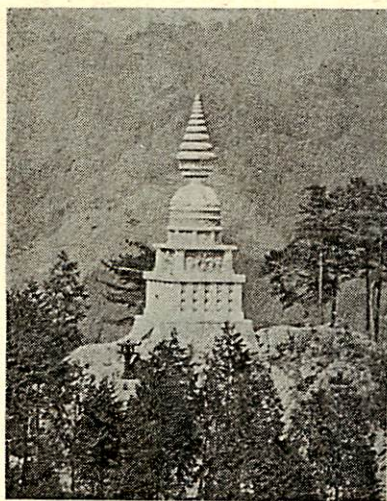


救世観音落慶開眼式に於ける桐江夫妻

○ 納経塔 昭和四十八年
救世大観音手前の広場から上り口があります。高さ十五米、内部にはお釈迦様の像があって、納経を守っておられます。

納経は壹万巻近く納められました。が、まだ数万巻が納経することができません。

岩上足がきけんのようですがつつじの株がたくさんに植えられ春となりますと、岩上はつつじの花で一面になります。



岩上の納経塔

○ 地球愛護平和観音 昭和五十年

仁王門をくぐって行くと開祖堂を経て、展望台につきます。ここに高さ十五米の地球愛護平和観音があります。地球上が荒れています。汚染されています。人類の苦を救うために、地球の上に観音様が立って、手にもったつばから霊水を地球に注がれてるおすがたです。まさに地球愛護の観音様です。

こうして地球が清められ、人類の幸福は世界の平和から、と、地球を守っておられるおすがたです。



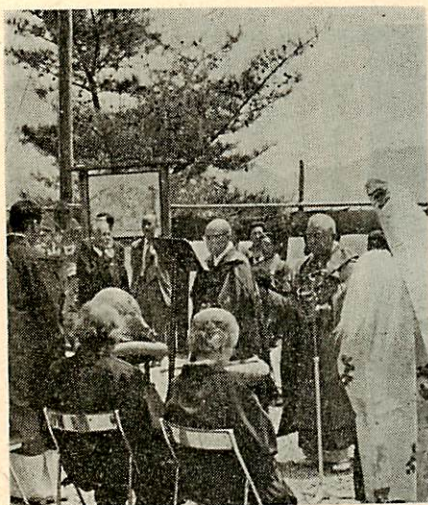
地球愛護平和観音

○ 大鐘楼 昭和五十年

三蔵法師靈骨塔、地球愛護平和観音、救世大観音本堂をとり結ぶ中央地点、白雲郷の中腹に珍らしい設計によって建立いたしました。

南バリ島にあった、やしの葉ぶきの鐘楼を桐江先生がごらんになった時の印象をここに現出されたのです。これも珍しい鐘楼と云われています。

鐘は、毎日、誰かによって、ならされています。



大鐘楼の落慶

○ 白雲山の境内地

三十ヘクタールの境内に江戸時代に植えた、杉檜が点々し、空を掃い、参道、歩道は、諸堂、塔をむすんで、参拝者に便利であります。

山内の花木は、何万と数知れず、先生夫妻が撫育なされた苦心のあとを、四季を通じて物語っている花の香、木のすがた、葉のいどりに見られる。

○ 行事

新年祈禱

節分会

积尊涅槃会

春彼岸法要

玄奘三蔵塔法要

さくら祭り

春季大法要

花まつり

塔婆施餓鬼

流灯法要

盆踊り大会



花火大会

秋彼岸法要

紅葉がり

大黒祭

积尊成道会

除夜特別供

養会

其他随時に

信者のお求め

に応じ、各祈

禱、法要奉詠

大会等修行い

たします。

おかげ様で

四十年の歩み

は健やかに参

りました。





道光禪師
(故高階瓊仙猊下)
御法話

自己(つづき)

(其の二十七)

静養の法は……心を静め気を落付、鼻息を静かに通すべし。

これはだれしも、まず気をおちつけ、呼吸をととのえることが一番大事なことであります。そして息がととのっているときは、鼻の穴からだけでたぐさんですが、なにかはげしい動作をしますと、心ぞうがはげしくおどって、鼻の穴では間にあいませんから、口まであけて、ハッハッハッといわなければなりません。だから気がおちついて、精神が静かであれば、鼻だけで十分であるから、「鼻息静かに通すべし」というのです。非思量ということは、坐禅をしておちつくところの心境です。これは道元禪師、(永平寺開山)の坐禅儀にあるおことばです。この

消息の法を、一日に十分間ずつでもやるということ
は非常によいことで、これが安静の入口であります
それでつぎに、

「苦業生死の境、多忙繁雑の境、喜怒哀情の境等
其他の万境に臨むと雖も決して氣息を乱ることな
らんことを要す」とあります。

これはこの世のなかは、真に複雑な世界で、苦がある、生がある、死がある、実に多忙はん雑の境地
喜怒哀情の境地、その他、いかなる場面、機会にあ
おうとも、決してこの氣息をみだしてはならない。
それには常に、調息の修養をして、精神をねってお
けば、どんなときにのぞんでも、決して呼吸はみだ
れぬものです。柔道でも、剣道でもみなそうであり
ますから、臍下丹田に力を入れて呼吸をととのえる
氣息がみだれると手忙脚乱といって、足がみだれる
手がみだれる。そうなればもう勝負は、まげにさま
っています。だから達人は、いつ、うしろから出し
ぬけにきても、平素から氣息の訓練ができています
から、決してとりみだしません。「やっ」とかかっ

てくれれば、心得たりと対応ができます。けれども出しぬけにくらって、びっくりするようでは、もう気が乱れて、どうにもならず、とりみだしてしまします。ですからこの複雑な世のなかをわたるについても、いついかなるとき、どんな場面に遭遇するかもわかりません。そんなとき、この呼吸をみださぬよう平素の修練が必要です。

「氣息一度乱るときは、五欲三毒これに乗じて本性を失わしむ、故に時々刻々油断なく注意して決して怠ることなかるべし、始めのうちは不自由を感じずれども、慣るるに従って精神安静、氣力充滿、體力強健にして外物のために乱ることなきにいたるべし。この修養はげむ時は、自然に本来空の本性に帰り、物に応じ事にふれて得脱無礙自在なるべし」といってあります。

それではその方法はどうか？といえますと前にもいいましたように、呼吸は鼻からして、それを下腹まで取り入れるのであります。下腹を氣海丹田といつてありますから、ここまで呼吸は通わせなけ

れば駄目です。それがなれまさんとにかく胸先に停滞する。そうするとなにかちよつとした心配ごとでもあると、すぐに気がつまつて食事も進まない。頭は重くなる。足もとほうかうかして、小石にもつまずいてひっくりかえるようになります。だからこの下っ腹にうんと氣力をこめて、呼吸をかよわすことを修練することです。白隠和尚の内觀法というのもこれです。この修練に熟達しますと、足の踵から呼吸をしたという人さえもありません。まさか踵から呼吸のできるはずはないのですが、踵から呼吸が入りするように感ぜられるのであります。そういうようになると体力も加わり、氣も落ちついて人間の態度がちがってきます。それは「本来無一物」という無我の本性に徹底する修養のいき方であるからであります。その本性に徹底したところからふり返って、この千状万態と複雑な世の中に処していく、それが眞の流動であります。電車がなめらかに走るのレールが動かないからであります。もしもレールがフラフラ動いていたら、電車は走れませ

ん。人間の眞の活動も徹底した安静の底力から發動しなければなりませんから、なんとしても安静の修養が必要であります。前にも申したように「鼻息」静かに通じて呼吸を乱さぬよう訓練をすることであります。これはなれば誰にでもできます。そして「要領」を自得すれば、坐っていても、立っていても、どんな場合にもできます。ことにふとんの中に仰臥して両脚を十分にのばしてやれば最もよく、ねつきのわるい人もこれを四五回もやればすぐに熟睡できます。実におぼえやすく有益な方法です。今からでもすぐはじめられることをおすすめます。

九

つぎは安静に対して活動の方法を申しませう。「活動とは機にふれ物に應じて得脱自在無礙なるを云う。活動の自在は物に住せざるにあり。(物に住せずとは物に滞らざるをいうなり)財に住するものは財において自在を得ず。色に住するものは色において自在を得ず、食に住するものは食において自在を得ず。法(世法、仏法両者をさす)に住するも

のは法において自在を得ず。故にいやしくも住することあれば皆縛なり。而して物に住せざるの法は自己に住せざるといふは本来空なるにあり。空といえども是に住する時は既に空にあらざるなり。故に空とは住することのなきの意義なりと知るべし」

その初めの「活動とは機にふれ物に應じて得脱自在無礙なるを云う」とあるのは、自由自在の活動をするには、ものごとにつわられるということがよくないといっているのであります。およそ事は住滞、すなわち引つかかるところから円滑を失い、そこから禍わざいがおきるのであります。水もどんどん流れておれば活水といつて生きていますが、池に溜つて動かないと、死水になってぼうふうらやいるいるな虫がわくようになります。つまり活動が止まると腐敗します人間の身体も同様であつて、尾籠な話ですが、通じのよいときは気持もよいが、便秘をするとまことに気分がわるくなります。そうすると食べものが停滞しますから、いろいろな故障がでて、健康を害す。

以下次号

観音行の実践

兵庫 兵庫 兵庫 兵庫

光山 善雄

世間の苦を救う

つづき

源左は自分の心を反省し、「地獄必定、極重悪人と云う。自分の心中に鬼がおるから常に反省し、ざんげし、念仏生活に努力したのです。貪欲、瞋恚、愚痴を三毒の煩惱と申し、これらの煩惱があげれまわると、一家を亡ぼし町村を焼き一國を滅亡に導く諸鬼であります。

マッチ一本の火、煙草の火でも大火の原因となり山火事を起したり、大火災の源となります。これらの毒龍諸鬼を亡くするには政治や教育のみにては解決は困難ですから各人が観音様を念じ合掌すれば被害からのがれることができるかとあつて、あえて害せじ」とあります。

「若し悪獸の圍繞して、利き牙、爪ありて、おそ

るべきにも、彼の観音の力を念ずれば、とく無辺の方に行きさらん」

悪獸とは虎や狼や狂犬にかこまれて、恐ろしき鋭き牙や爪でかみ殺されんとする刹那、観音さまを念ずれば、これらの悪獸は皆逃げてしまふとありますこれを理積の上で申しますと悪獸とは心の迷いであり、強欲、しつと心、まん心、色情狂、虚栄心等でありましょう。この心が一つ迷路に入りますと深山に入ったようなもので、帰路がわからなくなり遭難いたします。迷信教を妄心し、狂信者も世間に多く家庭を乱し、さかりのついた猫や犬の如く、静かにしておれない、財もなくし、仕事をなくし、困る人も出て参ります。

色情狂ともなりますと女に迷つて財を散し家をも亡くし、家庭を亡ぼす人もあり、トバクにふけて無一物になる人もあり、娘を嫁入りさすに身分を考えず多くの道具を持参してあとは借金でくるしむのも又虚栄心の悪獸ではないでしょうか、わるい女にかこまれたり、暴力団に圍繞されて強迫される人も

あり、親の遺産をめぐる兄弟が法ていにて争う。

あとは仇敵となり兄弟の縁も親子の縁も切れてしまふ。吾々の周囲にはいろいろの悪獸が存在する。中には美服をきた者もあり、環境がわるく金剛の信心なくばそれらに食われてしまうようなこともありまふ。心の中には悪獸がこのこと巣を作りますから、安心して常に観音様とはなれない生活を実践することです。朝念観世音、暮念観世音であります。

「蚯蚓及び蝮蝎の気毒、煙火の燃ゆる如からんに彼の観音の力を念ずれば声に尋いで、自らかへり去らん。」

蚯蚓とは「むかで」蝮蝎とは「まむし」です。この動物は虎や狼よりは小さいが、うるさい動物です。かまれますと、特に「まむし」は毒を持っていますからその毒のために牛馬が倒れたり、人間も死ぬることがあります。これは印度の国に限ったことではありません。大島等はハブの本場です。これでは理積の上で味わいますと「むかで」や「まむし」とは煩惱の異名とあります。人間の悩み精神異状者や

ノイローゼのため一家が心中したり自殺したり、よくニュースで知ることですが、人間の恨み、これも心の異状者になりますと他人の家に放火したりしてこれを平気で見物している犯人もあり、大きな悲劇になることがあります。頭が柱にあたって頭が破れた話は聞きませんが、稲穂で目をつけて盲目者になったり、ホコリが眼に入って眼病になった話をよく聞きます。心の仕わざにしても一つ間違えますと米国のケネデー大統領の如き暗殺の大悲劇が突発いたします。皆これらは心の問題から発生いたします。大学の紛争問題も心の問題からと思えます。それが心がクシャクシャした時立腹した時、怒りに燃えた時、人間は何をやり出すかわかりませんから、心を静寂にして観音様を礼拝合掌すれば皆苦惱より解脱することが出来ます。観音力を念じなば多くの蝮蝎どもは散り去ってしまう。事積と理積を以って解脱すれば解脱することができましよう。

「雲雷鼓り颯電し、雹を降らし、大雨を澍がんに彼の観音の力を念ずれば、時に応じて消散すること

を得ん。衆生困厄を被むりて、無量の苦、身に逼るとも、観音妙智力、能く世間の苦を救い給う」

一九六三年十月三十日全国教師研修大会が箱根湯元の観光会館で開催されましたので、この機会に湯元から箱根観光バスで芦の湖につきますと富士山の勇姿が見えます。出発の朝は快晴でしたが、峠に上った頃より雲って参り、一天にわかには黒雲が出て来ますと大雨となり、そして雷がなりました。湖水から乗船する時に傘を持った者は私一人で百人余りの人は皆この大雨に困りました。私は杖の代りに、洋傘を持っておりましたから人様にも貸してあげ、一本の傘で数人は助かりました。「雲雷、雹雨難」はよく山登りをした人達の経験済みでありましよう。雲と雷とは兄弟で雷がなる時は必ず黒い雲が発生します。今日はその雷を利用して電気を応用しておりますが、昔は童話にあるように雷さんが雲のついで大鼓をたたいて走る。オヘソを出していると雷さんにとられるよ。腹をかくしてオヘソをかくしなさい。と教えられたもので、大雷にでもなりませんと

蚊帳の中に逃げたものです。雷は夏に多く、又雹をふらして農家に被害をうけることもあります。これは事積の上の解釈にて、理積の上でも味わって見ましょう。

人間の心の中は常に日本晴れの快晴ばかりではありません。何か一つ大きな事件に直面いたしますと迷いの雲に心はかこまれ、黒風吹きまくり、心の中が乱れて参ります。人間の立腹の姿を見ましても、平素の和顔の姿も立腹により一変し鬼の顔に変化し目つきまで変わってきます。言葉は暴言をはき、いよいよ雷がなり出しますと、大雨や雹がふり出します。兄弟姉妹、夫婦、親子が喧嘩が発生しますと平和の灯は消え仲違いとなり、後には裁判問題となり刑務所行迄発展いたします。これらの原因は皆強欲が元で、心の中に大風や黒雲がおおわれるからです。他人との争いともなると一そう大きな雲となります。夫婦相和し、お互いに拌み合う生活がいかに大切であるかがわかります。明るい家庭は観音信仰より、

以下次号



西遊記

(其の三八)

岡部千三

牛魔王

つづき

悟空は定風船があるから、おちついたものである。牛魔王が悟空をいくらふきとばそうとしても、おちついたもので、あべこべに牛魔王に切りつけていった。

けれども、牛魔王もふしぎな術を知っていた。切りつけられてもかるく身をさけるものだから、なかなか勝負がつかない。いつになっても決着がつかないので、ふたりはとうとうへとへとにつかれた。

そこへ、らせつ女がかけつけてきて、牛魔王に、みかたをした。それでも勝負がつかない。

牛魔王はにげだそうとして、一匹の白いちようになつた。悟空はよしてきたそれならこつちもやるぞ、と云いながら、すずめになつて、とつてくおうと、

ちようにおいすがつていった。

あつ、もうちよつとで、すずめのくちばしが、ちようにとどきそうになつたところで、ちようは、たかに早がわりした。すずめに向つて、するどいつめをむけてきた。すると、すずめは大きな鳥になつてたかにむかつた。と、牛魔王は、こんどは地において、しかにかわつていた。悟空は、すぐとらになつて地におりた。

牛魔王と悟空のはげしいくさは、めずらしいばけくらべになつた。牛魔王が熊になれば、悟空はぞうになる。おたがいに、あい手よりも大きなもの、つよいものにかわつて、力かぎり、術のあるかぎりたたかつた。

とうとう牛魔王は、大きな白い牛にかわつた。これが牛魔王のほんとうのすがただったのである。もうほかのものにはなれない。

悟空も、大ざるになつた。

千丈の大ざる悟空と、千丈の大牛牛魔王のたたかう物音は、天上まできこえていった。

なだ太子が、このようすを見て、

「悟空を、たすけてやらなければなるまい。」
さっとおりてきて、まほうの鏡で牛魔王をてらし
て、目のくらむところをとりこにし、ぼしょう扇を
とりあげてしまった。

これはかなわないと思って、らせつ女もこうさん
して、やっとなだ太子によっておさまった。

「もうわるいことはしません。ですから、ぼしょ
う扇はおかえしてください。」



「かえしてもよいが、火炎山の火をけさなければ
とおれない。どうしてけすのか。」と、悟空がおちつ
いた顔つきできいた。

「ぼしょう扇で、四十九かいあおげばきえます」
「よし、では火をけして、土地の人をよろこばせ
よう。」

悟空は、ぱっぱつと四十九かいつづけて火をあお
いだ。すると、らせつ女のいったとおり火はきえて
ざあざあと雨がふりだした。



天竺

王の病氣

春になって、木には花が咲き、小鳥がなきだした
そしていよいよ旅もたのしくなってきた。おもしろ
いように道がはかどり、のんきものの八戒は、とき
どき、はな歌などうたって歩いた。

やがて、四人が朱紫国しゆしこくという国をとおりかかると
町のつじに、つぎのような立札が立てられていた。

朱紫国の王の病氣は、なかなかよくならない。こ
れは、国じゅうのしんばいだから、だれでもよい名
医は来て、王を診察せよ。名薬があれば、さしだ
せ。王の病氣をなおした者には、ほうびとして朱紫
国の半分をあたえよう。

悟空は、これを見ると、たちまちいたずらをして
みたくなった。こっそりと立札の紙をはがして八戒
のふところにいれ、じぶんは、なんにもしらない顔
をしていた。

そこへ役人がきて、八戒をとらえ、城へつれてい

こうとした。

「なにをする、らんぼうするな。わしは、わるい
ことなどしたおぼえはないぞ、」と八戒は、もんくを
いいたてたが、役人はきかない。

「おまえのふところから、これみる、立札の紙が
半分でいてるではないか。それを持っているところ
からかんがえると、おまえは世に知られた名医か、
それとも名薬を持っている者ではないか？くずくず
いわずについてまいれ。」と八戒を引つ立てていっ
た。

見ていた悟空は、おかしくなつて、役人のまえへ
とびだしていった。

「王さまの病氣は、わたしがなおしてさしあげま
しょう。」

「悟空のきょうだい、病氣がわかるのか。ほらを
ふいて、あとでこまりはしないのかい。」

と、八戒がしんばいするのを、

「だいじょうぶ、まかせておけ。」

(以下次号)



田舎医者(其の二十四) 見川鯛山

天皇陛下バンザイ

前号のつづき

「日の丸の旗だしてるだぞ、出ていねえのは君とこだけじゃないか!!」

気負いこんで若い巡査がいうと、金三郎がふんとその赤い鼻で、せせら笑った。

「なあんだ、そんなことかつまらねえ」

「つまらん!! おれがいてえこたアな、そんなことじゃねえ、いいか、きょうみてえな国の祭でもねえときにア、どこんちでも旗なんかつん出さねえで、陛下様たちアそつとしてやった方がいいってことだ。みんな、馬鹿さわざすぎるだ!!」

「何をいうか君ア!! な、生意氣だぞ貴様!! きさまんとこじゃア、旗がねえんだろ旗が!!」

と、金三郎の孫ほどの若い巡査が怒鳴り立てると烈火のごとく彼が怒った。

「な、なんだとこの野郎!! 旗だらあるぞ、おれんとこの旗アな、しかもおれんとこの旗アな、せ、戦死したせがれのがロシアの戦車にやられて、蛙みてえにつぶされたとき、そんなとき腹さ巻いてた、血だらけの、りり立派な、せ、せがれの……日の丸の旗だぞ!!」

と、スコップを握りしめて、金三郎が泣いた。道路工夫の太い腕でその顔をおおいながらオイオイと泣いた。

翌日。那須高原の梅雨空がからつと晴れた。その明るい目にしみるような緑の中で、初夏の蟬がいつせいに鳴き出し、森から森へ郭公がとんだ、そして

遠い、どこまでも遠い平野の空に真白な入道雲がわいた。

高原ではめずらしく暑い朝であった。天皇陛下は茶色のスポーツシャツ、皇后陛下はクリーム色の、ブラウスを着て、にこやかな顔で御用邸を出た。それはほんの四、五人の供を連れた気軽な散策であった。うっそうとした森の小径で、梢から初夏の陽がもれ、そのやわらかな緑色の光が天皇の帽子の上でかるやかにおどった。

その小径のすぐ先に、金三郎の小屋の裏手までつづく細長い湿地があった。ジメジメしたやわらかな草の中で、きすげやさぎ草や風車草が咲く、天皇の大好きないつも来る湿地であった。そして陛下は、その草を分けて歩きながらふと、きのう車の中から見た金三郎の貧しい草ぶきの小屋を見つけたのだ。

「あれ開拓者の家か？」

陛下がふり向いて供の者にきいた。だが、丁度、その時であった。小屋の戸がガタガタと開き、中から金三郎がかけ出してきた。

「お!! あの男あやしい!! とまれ、とまれ、」
あわてふためき、供の男が二人、熊のように両手を上げながら金三郎の方へおそいかかっていた。すると金三郎はその間をすりぬけ、畑に積み上げた石ころの上に立ちあがり、追いついた男たちに両脇から抱き締められながら、せがれが血で染めた、どす黒いしみのある日の丸の旗を頭上にふりかざし、ちぎれるようにふりつづけた。

逃げ腰になっていた陛下はそれを見るとにこにこ笑い出し、後ろの皇后様をうながしながら、金三郎に答えてなんべんも、なんべんもその手をふつたすると、もうたまりかねて金三郎が泣きながらさけんだ。

「天皇陛下バンザイ!!」

皇后陛下バンザイ!!」

檻

ひさしく雨が降らない。

高原の強い太陽が火山灰の道路をバサバサに乾か

し、ときおりバスが灰神楽をたてて通る。

重い往診鞆をぶら下げた私のだるい腕を、汗が肩から伝わって流れ、手の平で鞆の握りがツルツルすべる。

すりへったゴム底の靴では、地面がやけて、足のうらがあつかった。やっど見つけた木立の陰へ私はかけこんで腰をおろした。アザミの葉っぱでチクチク尻が痛い、そこに僅かな高原の涼しさがあつた。一服つけていると、その道を女が鉄砲をかかえ血相かえて走ってきた。藁草履がペタペタ鳴って、団扇であおぐように土埃を立てる。

「はてな？」

首をかしげて見ていると、近づいてきた女は「那須バーバー」の母ちゃんだ。床屋のくせに髪をふり乱し、目が血走って、これはただごとでない。私は往来へとび出し、両手をひろげ、彼女の行くてをさえぎって言った。

「そんな、ぶっそうなもの持って、どこへ行くんだ!!」

「おお、あんたは、医者さま……」

母ちゃんはびっくりしながら、急ブレーキをかけた目の前でズズズッと停った。

その息使いが荒く、馬車馬のように鼻の穴をふくらませている。

「止めたつてムダだ、そこをどいてくれ」

「いや、どかぬ。わけを話せ」

「あんたにや、関係ねえことだ、どける!!」

「わけを話せ。父ちゃんとけんかしたのか」

私がきくと、怒り狂った母ちゃんの顔が、一瞬ふっと笑って云った。

「オヤジと？ だれがあんな腰抜け野郎と……、

俺は犬殺しことブチ殺しにいくんだ!!」

「ブチコロス？」

「そんだ!! 一発で殺してやる」

と、こわい顔だった。私もずいぶん人を殺してきたが、一度だって、こんな顔をしてコロシたことはなかった。

「さっ、どける!!」

以下次号

平沼先生寿像

(第三号)

建立協賛芳名

(五四、四、二現在)
(啓称略)

| 年額 (千円) | | 住所 | | 芳名 | | 金額 (千円) | | 住所 | | 芳名 | |
|------------|------|----|-----|----|-----|------------|----|-----|----|----|--|
| 二〇 | 名栗村 | 有馬 | 忠直 | 一〇 | 名栗村 | 浅見由之助 | 一〇 | 名栗村 | 竹沢 | 算富 | |
| 二〇 | 世田谷区 | 尾尻 | 天外 | 一〇 | 〃 | 〃 | 一〇 | 〃 | 岡部 | 敏 | |
| 一〇 | 名栗村 | 町田 | 伸太郎 | 一〇 | 〃 | 〃 | 一〇 | 〃 | 佐野 | 正助 | |
| 一〇 | 〃 | 町田 | 義晴 | 一〇 | 〃 | 〃 | 一〇 | 〃 | 〃 | 〃 | |

右表計

八名

一〇〇、〇〇〇円

五千円以下協賛

九三名

一八九、〇〇〇円

合計

一〇一名

二八九、〇〇〇円

前回迄の報告分

一、五五五名

一六、一三〇、〇〇〇円

総計

一、六五六名

一六、四一九、五〇〇円

御礼

皆さまから篤いご協賛を賜りましたことについて心から厚く御礼申し上げます。

除幕は本秋を予定し、更めてご案内申上げたたく存じております。

合掌

鳥居観音だより

終了した行事と参拝状況

昭和五十四年一月元旦祈禱 十時

年末お申し込をうけた、祈禱札は、二千余札となり、ご本尊聖観世音菩薩の前、左、右にその清札が飾られて新春の気の満ち満ちた堂内の清気は心を引きしめる、祈禱は当山尾尻老師の導師と、有馬、鯨井両老師によって修行された。

参列者は、川越新友講元、斉藤新作様、川越講元原田様一行、所沢講元小山様、飯能平沼様、水上様地元篤信各位五十余名で、親しく新年のごあいさつを交わし、和気あいあいのうちに懇談いただき、たのしく、元旦祈禱も終った。

参拝者は例年になく暖かさのためか、終日にぎやかにおまいりになった。

一月二日、宮田様外二七名祈禱来山、本日も、入山参拝者でにぎわう。

一月三日、中原様外三十三名来山祈禱、一般参拝入山多数でにぎわう。

一月六日、志賀豊三様、江崎元堂様、田中様来山自動車の入山多く、暖冬の日となる。

一月九日、入間市吉田、小田様来山、春のような日となった。入山参拝多数。

一月十三日、黒田様、祈禱に来山、武州印刷からとりぬ四十四号届く。

一月十四日

与野市松本様
服部様、仁王
門の視察来山
一月十五日
小正月で、参
拝団あり、山
内にぎわう。
時折鐘をきく



参 拝 の 一 団

一月十九日、日本電装KKより十三台の自動車の交通安全祈禱に来山、尾尻老師により祈禱修行、

一月二十一日、天候よくて参拝者多し。

一月二十三日、黒田祈禱に来山、観光バス四台入山、山内にぎわう、鐘の音もしきりになる。

一月二十四日、武野市佐々木様来山奉納あり。

一月三十日、本年初めての降雪、最近は雪も少なく、空気も乾

きがちなところ、久方ぶり

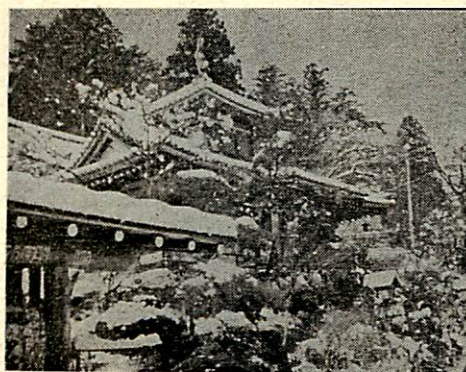
の降雪に、野

山が白一色に
変った。白雲

山はこの雪で
大自然は清め

られた。参道
の雪も翌日除

雪完了、入山
可能となる。



二月三日、節分会、午後一時より尾尻老師にしたがって、救世大観音、三蔵塔、奥の院、本堂と順に豆まき、吉祥祈願修行す。

二月七日、バスで参拝団あり。

二月八日、初午で稻荷様に供物して（油揚）初午祭りを修行、赤い旗が風に時折はためいた。

二月十日、初ざる、山の神様におみきを供え山の安泰をいのった。

二月十一日、暖かい日、自動車入山多し。

二月十二日、浦和市、合川様来山、戦友会白川会主催の慰霊祭修行申込を受く、（七月十五日）

二月十七日、平沼桐江ご夫妻来山、全員中食の馳走になり、食事中四方山の話にたのしかった。

二月二十五日、天気よく、参拝者も多し。

三月一日 小林頼四氏、山門の関係事項打ち合せのため来山。

三月八日、バスでの参拝あり、浅春の白雲山も、暖冬だった、ためか、三ツ葉つじのつぼみもふくらんできて、山全体がいろづいてきた。

三月十三日、駐車場の整備に着手した。本堂前の駐車場につづいて拡張すべくブルを入れて排土と整地をなす。これが出来ると沢山な車の駐車ができるので、参拝者には大変便利となる。

三月十五日

秩父郡横瀬

村田中義雄様

祈禱のため来

山、外観光バ

ス二台来山、

春季例大祭

案内状発送、

三月十七日

暖冬つづき

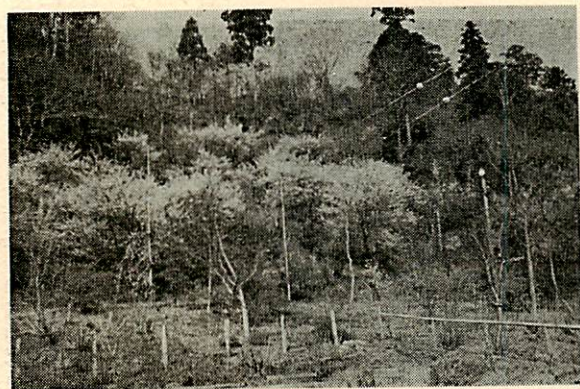
で山内の梅が

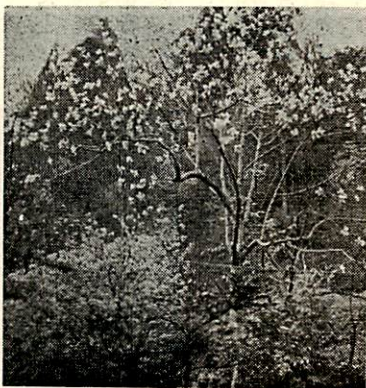
咲き初める。

練馬、杉並、

座間より来山

客あり、





三月十八日
八王子、東
浅川、小平
江戸川等、
から来山、
三ッ葉つっ
じも咲きは
じめた。
三月十九日
所沢観音講
四十名参拝
平沼先生ご
夫妻来山、
三月二十七
日、飯能市
畑講来山、
講中安全の
祈禱、後入
山。

四月一日、山内の三ッ葉つっじがうつくしく咲く
春休みの家族連で本堂附近から山内がにぎわった。
四月十七日、春季例大法要 十時
恒例の大法要、役員、講中、一般参拝者によって
盛大に修行す。
折から新緑かおる中、つっじをはじめ百花咲き乱
れていたの、来山者はこの美にうっとりときられた

○ これからの行事その他

ふじまつり
五月十五日
から末日まで
ふじの花ざか
り、ご参拝と
ご探勝をおま
ちしています
あじさい
六月からあ
じさいが咲き

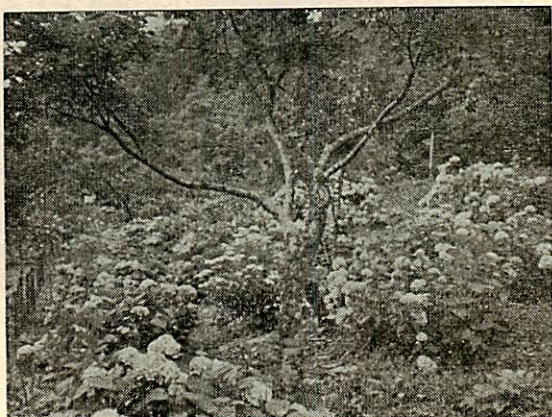


七色に変化するという花をごらん下さい。

七月十六日、塔婆施餓鬼供養を救世大観音の堂内で修行、東京のお盆というので東京からの参拝お待ちします

八月十六日、流灯供養、盆おどり大会と花火大会
当山随一の大行事となりました。

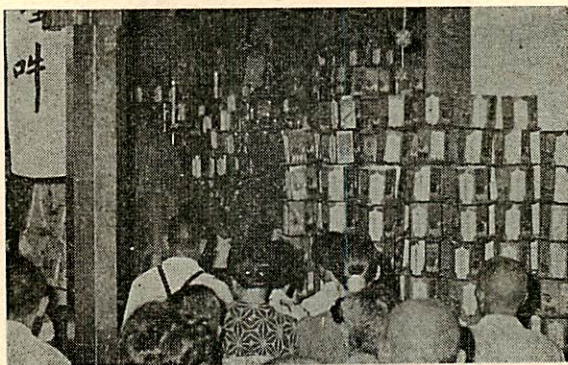
本年も一だんと盛大な行事といたしたく、今より皆様方の格段のご支援と、ご協力賜りますようお願い申し上げます。



名栗はお

盆様ですか
ら故郷へ泊
りに来た人
や、夏休み
なので、泊
りに来てい
る人も多く
夏的情緒も
ゆたかで
す。

夕涼みか
たがた、参
拜後、ご参
加下さい。



流灯法要状況

とりの 第四十五号 発行日 昭和五十四年五月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
印刷所 鳥居観音 電話 〇四二九七―九一〇四一七
発行所

夏の行事

●施 餓 鬼 7月16日

東京はお盆様です。大塔婆供養を救世大観音堂亭内に修行いたします。

御申し込は7月10日までにおねがいます。

大塔婆は 1,500円以上

●名栗川流灯供養 8月16日

月おくれのお盆です。本堂内にて法要し、夕刻名栗川にて流灯。

御申し込は8月10日までにおねがいます。

●常時祈禱修行いたします

家内安全、商売繁昌、交通安全

諸願成就、其他